



松岡光治編

『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』

矢次 綾

(国際多元文化専攻 博士後期課程 2008 年修了、松山大学人文学部英語英米文学科教授)

『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』(以下、『ギヤスケルで読む』と略記)はヴィクトリア朝の小説家、エリザベス・ギヤスケルの生誕200周年を記念して松岡氏が企画したもので、30(村岡健次氏による「序章」を入れれば31)のトピックのそれぞれについて、海外の3人の研究者を含む31人の研究者が執筆した論考を集めたものである。第一部【社会】(「教育」、「貧富」、「階級」、「国家」、「自然」)、第二部【時代】(「科学」、「宗教」、「郵便」、「子供時代」、「レッセ・フェール」)、第三部【生活】(「衣」、「食」、「住」、「娯楽」、「病気」)、第四部【ジェンダー】(「女同士の絆」、「女性虐待」、「売春」、「ミッション」、「父親の温情主義」)、第五部【ジャンル】(「ゴシック小説」、「恋愛小説」、「歴史小説」、「推理小説」、「演劇的要素」)、第六部【作家】(「自己」、「言語」、「出版」、「ユーモア」、「同時代作家」)の六部から成り、筆者も執筆者の一人として「歴史小説」の項を担当した。

『ギヤスケルで読む』の特徴は、J・ヒリス・ミラー氏が「巻頭言」で述べている通り、「ギヤスケル作品に焦点を定めてはいるが、ヴィクトリア朝の社会と文化のすべてと関連づけて所定のトピックを論じている」点にある。例えば、章の主題が「衣」であっても、特定のギヤスケル作品における「衣」というように限定的にトピックを論じるものではない。そのため、本書を通して読めば、ヴィクトリア朝前半の社会および文化全般に接し、当時についての理解を深められるようになっていく。もっとも、著者の一人ではなく読者として今回本書を読み直して印象に残ったのは、同時代の多種多様な社会的、文化的現象の多くにギヤスケルがいかに真摯に向き合い、記録に残したかということであった。小説家である以前にユニテリアン派の牧師の妻であり、母親でもあった彼女の知的エネルギーに圧倒された。「コンディション・オブ・イングランド小説の作家」というような一面的な捉え方をされがちなギヤスケルだが、その懐は深く、フィールドは広い。「女同士の絆」といった最近になって発展したプロコトルに依拠する話題でも十分に論じられ得る。もっとも、本書で扱われたトピックの中には、彼女が問題意識を持って記述し世に訴えかけようとしたもの(例えば、「売春」)もあれば、直接的な考察をしているわけではないが、それに類する要素を著述物に取り込むことによって同時代の思想的、文化的傾向に対する彼女の反応を示唆しているもの(例えば、「推理小説」)もある。いずれの場合にしても、本書を読めば、彼女が当時の傾向を自分なりに消化し、彼女自身の表現へと昇華させたことがよく分かる。

『ギヤスケルで読む』では、例えば松村昌家氏が「貧富」の項

で行っているように、ギヤスケルが呈したのと真っ向から対立する見方を挙げたり、ギヤスケル以外の人物の筆による一次資料を提示したりするなどして、そのバイアスも含めて彼女の立ち位置が明確にされている。これは、だからヴィクトリア朝について理解するためのある種のフィルターとしてのギヤスケルに欠陥があるというのではなく、一人の知的な人物を通してある時代を理解することの有用性を示唆している。「教育」の項でアラン・シェルストン氏が、ヴィクトリア朝について「現在我々が手にできる資料には、地域、ジェンダー、そしてもちろん社会階級などの問題が絡んでくる」ため透明性が疑わしく、「最も信頼できる資料は当時の個々人の生活を描いた記録だろう」と指摘しているが、「個々人の生活」もしくはその断片こそ、ギヤスケルが記録に残したものである。架空の人物について書いた小説であっても、その背後には彼女自身が経験したり、見聞きしたりした現実の生活があり、彼女の目を通し記録として再現されたものだ。このように信頼性の高い資料になり得るギヤスケルの著作と、彼女とは見方が異なる資料を同時に提示することによって、ヴィクトリア朝の多面性が浮かび上がってくるのである。

ヴィクトリア朝関係者ではない、ある研究者の方が『ギヤスケルで読む』を「ギヤスケルについてのあの分厚い本」と呼び、「ギヤスケルについてこんなに多くの話題があるのですね」と感嘆しながら、『メアリ・バートン』以外の作品も読んでみたい、とおっしゃっていた。ギヤスケルの生誕200周年を記念するに相応しく、『ギヤスケルで読む』は新たなギヤスケリアン誕生にも一役買っているようである。

(溪水社、2010年)